

「ブラジル人の子らに母国語の学校を」

世界平和をテーマに倉敷

市中央1丁目の市芸文館などで開催中の「ピース☆フェスタ」(世界連邦運動協会県支部などで行く実行委員会主催)は9日、政治家やNGO関係者による「地球平和フォーラム」などが開かれた。参加者らは、平和や国際交流などについて思いを深めていた。

フォーラム前半の「自治体サミット」には、コーディネーター役の片山虎之助・元総務相と倉敷、総社、備前3市長が出席し、自治体の役割について議論し

「ピースフェスタ」で総社市長

た。

片山氏が「世界平和に近づくため自治体としてどんな取り組みをしているか」と問うと、片岡聡一・総社市長は、外国人の人口比率が県内で最も高い同市の現状や、教育の場で積極的に国際交流の機会を設けていることを紹介。「特に数が多いブラジル人の子どものため、母国語のポルトガル語を学べる学校を市内に設立したい」と表明した。

また、西岡憲康・備前市長は、旧日生町地域の漁師

らが明治時代に韓国・蔚山(ウルサン)市付近へ移住した縁で、両市の小学生が毎年互いにホームステイするなど交流を深めている事例を報告。

「竹島問題で日韓関係がぎくしゃくした時も、我々の関係は変わらなかった。世界平和は日ごろのつきあいからです」と呼びかけた。

フォーラム後半のパネル討論では、国際医療NGO「AMDA」(本部・岡山市)の菅波茂代表や県選出国会議員らが「平和な未来をこどもたちに」のテーマで語り合った。



世界平和への自治体の役割を話し合う片山虎之助・元総務相(左端)と3市長川倉敷市中央1丁目の市芸文館で